

山と博物館

第27巻 第2号

1982年2月25日

大町山岳博物館



大町の飴市(2月10日)

撮影 丸山隆士

大町の飴市

二月十一日は「大町のアメ市」。この飴市が巡りくる度に、謙信の義塩について語られてきた。十六世紀半ば上杉謙信と武田信玄の数回にわたる川中島の合戦中、謙信は「争うべきは弓箭にあり、米、塩にあらざる、宜しく塩を吾国にとるべし」と伝え、敵対する山国の民百姓に塩を送ったという。駿州の今川氏と相州の北条氏は、甲州勢を搦手から謀って食塩の道(南塩)を絶つたため、信玄は孤立、甲州、信州の民百姓は困憊、甲州の兵は狼狽の極に達していたときである。

その塩が謙信から届いたのが永禄十二(一五六八)年の正月(旧暦)十一日のことだという。謙信義塩の史実が文献上の根拠は明確ではない。が、ここではひとつの文献、糸魚川市歴史民俗史料館の相馬御風記念館本「信州問屋由来記鑑」にのみてみよう。全二巻からなる同由来記鑑の第一巻のはじめにつきの一文がある。

「こ、四方敵に取囲 海辺知たまハす 塩味のミ御こまり信州国中之民百姓可及渴命由(中略)たとへ敵国たりとも国民之難洩見捨かたく……信州より罷下 塩荷物背おい 或者牛馬附越けれハ 信州の民百姓悦事誠二孤之親を見附し心地なり 依之仁科殿始其所之城代へも百姓より塩を差上申候而 誠に危き命を助候也」「西浜海辺に出来之塩 年毎に三千駄宛無不足様差送可申様御申附誠成候」

謙信の義塩の申越をうけ、信州の民百姓は人の背と牛馬で糸魚川から運び入れ人民はもとより仁科氏や城代へも差上げ命を助けてもらった。いろいろ糸魚川海辺で作られる塩は毎年三千駄ずつ必ず送るようになった。という時あたかも雪の多い二月十一日のこと。塩に代る代替物はない。それだけに塩にまつわる故事は多いといふべきか。近松門左衛門らの脚色にすぎないと断定する向きもある。越後の海と信州の山の民との間に花開いた、越後の武将の美談」として受けとるとき、そこには、人間愛に根ざすロマンが甦るのである。

(大町市史編纂室長大日方健)

安曇の酒づくり

両角 譲

一、酒造家の足どり

室町時代の頃、奈良の「諸白酒」が名声を得て、これを転機に濁酒と区別されわが国独自の酒の造り方が固定化した。これが今日の日本酒の基本である。そしてその酒づくりが「業」として酒屋が生れ営まれるようになった。

江戸時代に入るとこの酒は一般民衆のものとなり特別な祭りの日ばかりでなく、日常生活に広く深く浸透していった。

明治になり酒税が解放されると、農村に蓄

積されていた地主資本がいつせいに活動し、明治九年には長野県内に一千数百軒もの酒屋が出現した。この酒屋は増加し続けたが明治十三年をピークに、同十六年には九百八十四軒、同三十年には五百四十六軒というように減少していった。

信州の清酒がもつとも大きく花開いたのは大正十三年頃である。名古屋税務監督局が管内の酒造番付を作った。信州の酒は万丈の気をはき、安曇の酒も薄井合名(現薄井商店) 福島幸重(現市野屋商店)、そして松川醸造合資(現在なし)の三店とも前頭として一千石以上を醸造していた。

江戸時代の末期になって寒い時期に酒づくりをするに品質の高い酒ができることから、業界はこぞって「寒づくり」へ集約した。この寒づくりにには気候、風土が大きな影響を及ぼした。

さてそれでは酒づくりはどのような行なわれたのであろうか。四十年ほどきかのぼった安曇の酒づくりのことを記してみよう。

北アルプス山麓の冬は冷たく厳しい。その季節の中でも特に寒気の激しい寒中の夜半から朝にかけて行なわれる酒づくりは大変な仕事であった。

凍てつくような夜中に蒸米係(釜屋)が起きだして酒づくりをはじめる。釜に火を入れる。釜といつても六石(一石は約百八十リットル)から十石も入る大きなもので、釜の口の直径は一メートル以上もある。何十石もの蒸米作業がはじまる。

午前四時頃になると他の係も起きて、仕込桶に水を入れ麹を入れてかくはんし、温度をととのえ米の蒸し上げるのを待つ。

蒸米ができるとまず杜氏が蒸し具合を調べ、蒸米の軟硬を吟味した上、待機している全蔵びといつせいに作業開始のあいずをする。

「こしき」(蒸し器)から蒸米をとりだす係、「むしろ」に蒸米を広げる係、広げた米を手早く冷す係、糊室に蒸米を運ぶ係、蒸米を配りに仕込む係、掛米(蒸米)を桶に仕込む係、これらのさまざま作業を朝飯前の二〜三時間ですませなければならぬ。

仕込みがすんだ桶には清めの切火が打たれたら、それに蔵びとたちがよき酒になるようにひたすら神に祈る時でもある。

仕込まれた桶は一日目には添仕込みといって、醗に麹と水を加え、全体の三分の一つ蒸米を入れる。二日目は醗母がだん／＼ふえるのを待つ。三日目に仕込みを行う。仕込む量は全体の三分の一、第四日目に残りの量を仕込む、これを留仕込みという。

二、むかしの酒づくり

第二次大戦が終り昭和三十一年には転廃業者の復活があった。

三、作業唄

留仕込みの終わった桶の中は温度が次第に上がる。毎日かくはんを行って二十一〜二十二日くらいでアルコール分は十八%くらいとなる。アルコール分を含んだろみ酒袋に入れて槽(ふね)と呼ばれる圧搾機の中に積んで、圧力をかける。むかしの酒づくりはこのようにして行なわれ今日におよぶ。

寒中の厳しい寒気と眠気、それに家族を残しての出稼ぎの淋しさに耐えるために、数々の作業唄が生れた。それは作業工程によって異なるもので、「流し唄」は道具洗いの歌、「数え唄」は米洗いの歌で元気をつけ桶数をかぞえる。「醗摺り唄」「切り火」「二番搾」「三ころ突き」などの唄には願いと祈りがうたいこまれている。これらの作業唄の中で「酒づくり三コロ」など「酒づくり謠物」「酒づくり三コロ」など



酒造用品のいろいろ(酒の博物館所蔵)

東		西	
名古屋税務監督局管内清酒一石以上造家番附			
大正六	一七九	伊東	合資
大正五	一七〇	安曇	合資
大正四	一七一	安曇	合資
大正三	一七二	安曇	合資
大正二	一七三	安曇	合資
大正一	一七四	安曇	合資
大正〇	一七五	安曇	合資
大正	一七六	安曇	合資
大正	一七七	安曇	合資
大正	一七八	安曇	合資
大正	一七九	安曇	合資
大正	一八〇	安曇	合資
大正	一八一	安曇	合資
大正	一八二	安曇	合資
大正	一八三	安曇	合資
大正	一八四	安曇	合資
大正	一八五	安曇	合資
大正	一八六	安曇	合資
大正	一八七	安曇	合資
大正	一八八	安曇	合資
大正	一八九	安曇	合資
大正	一九〇	安曇	合資
大正	一九一	安曇	合資
大正	一九二	安曇	合資
大正	一九三	安曇	合資
大正	一九四	安曇	合資
大正	一九五	安曇	合資
大正	一九六	安曇	合資
大正	一九七	安曇	合資
大正	一九八	安曇	合資
大正	一九九	安曇	合資
大正	二〇〇	安曇	合資

中国醸造新聞社

の歌は小谷の民謡集の中にあり、小谷民謡保存会の人々によってうたいがれている。

四、小谷杜氏 (おたりとうじ)

酒づくりに欠かせないものは杜氏であり、蔵びとである。これらの人々の努力が今日の安曇の酒をつくり上げたといえよう。
江戸時代から酒づくりの仕事は、杜氏を中心に三役と呼ばれる頭、麴師、配師にほとんどまかされていた。それ以外の人々は酒屋も、酒六、百日とか呼ばれていた。
杜氏は現代風というならば、工場長であり製造部長で、その酒屋の財産をあづかっているに等しいのである。

江戸時代から明治にかけての杜氏は酒造家みずからが兼ねており、本人が指揮して酒づくりを行ない、それにかかわる蔵びとは近頃の農家の子弟を使った。

明治の終りから大正にかけて酒造技術を持つ十分に訓練された杜氏が、越後(新潟県)から長野県内に大きく進出してきた。そのため安曇地方の酒づくりは三役を従えた越後杜氏に変わっていった。

県下酒造場の杜氏、役人出身地 (昭和13年、長野県調べ)

	杜氏	頭	麴屋	配屋
総数	260	226	143	108
長野	139	134	71	68
新潟	100	85	85	57
福島	9	5	6	3
山梨	9	0	8	4
愛知	2	1	1	1
山梨	1	0	0	0
岐阜	0	1	0	0

昭和30年前後の杜氏分布表

協会名	製造場	訪友	小谷同	飯山同	新	濁
久田	12	—	1	—	11	9
野野	12	—	2	—	9	9
坂町	13	—	—	4	9	9
本曾	12	—	—	12	—	—
訪那	8	—	—	8	—	—
田計	7	—	7	—	—	5
伊飯	16	1	10	—	—	—
合	6	—	6	—	—	—
	10	—	—	—	—	3
	9	—	1	—	—	3
	3	—	—	—	—	3
	108	16	27	25	—	40

大正に入ると今度は越後杜氏より優れた技術を持つ広島杜氏が進出し、安曇地方を含む長野県内の杜氏の主流は越後杜氏と広島杜氏によって占められるところとなった。

この頃はまた小谷杜氏はなく、当時の小谷地方は「酒屋もん」の供給地で、酒づくりの経験者が多いところという程度であった。その後小谷出身の蔵びとたちは自立すべく、小谷方面へ広島島の優秀な技術を持つ杜氏をたびたび招き技術の習得にはげんだ。その上に経験と努力を積みかさね現在の小谷杜氏の基礎をつくったのである。

昭和に入り小谷杜氏は優秀な技術者として安曇地方をはじめ、松本、木曾、遠くは福井にまで進出していった。そして昭和九年、大町の北安醸造は全国清酒品評会の名譽賞に輝き、同十三年には大町薄井合名ほかが入賞し、小谷杜氏の酒造技術の優秀性を立証した。薄井合名ほかが入賞した十三年、諏訪、小谷、飯山の杜氏および三役の数は他県を大きく上まわることになる。そしてかつては長野県内の主流を占めていた広島杜氏は急激に減

北安曇の杜氏 (小谷杜氏) (敬称略)
(昭和四十五年) (現在)

金らん黒部	相沢澄男	相沢 澄男
白馬錦	花岡嘉金司	猪又 賢治
北安大国正宗	繁沢 重雄	細野 重任
安曇野	山崎 孝	山田 幸雄
大雪溪	高橋 章	高橋 章
福源	小倉 康弘	小倉 康弘

少し、一部に兵庫の杜氏がとどまった程度で、この他県の杜氏の減少傾向はその後も続き、今日では越後杜氏すら極めて少なく、昭和三十年には安曇地方の酒づくりは小谷杜氏の独占するところとなった。

小谷地方の蔵びとたち二百五十人が結集して小谷醸友会を作ったのは昭和二十五年、県下随一の勢力となり、長野県内はもろろんのこと、静岡県、岐阜県、福井県などへ進出し、長野県下では百八人の杜氏をもつにおよんだ。この小谷醸友会の事務局は今小谷村役場の中にある。

五、酒の甘辛

日本酒を煮つめて器の底にべったりと飴状の物質が残る。日本酒のエキスである。このエキスを指先につけてなめてみると甘くてすっぱい味がする。

このエキス分が酒の甘辛にかかわってくる。エキス分は糖分、アミノ酸、有機酸、その他の物質から成っている。エキス分が多くなると糖分の量が多くなる。エキス分を測定すれば甘辛がわかるわけであるが、これにはいろ

目安としての甘さ



な問題があつて難かしい。この測定には日本酒度計という便利な測定器具がある。アルコール分と比重から甘辛を算出するのである。

これは清酒用に特別に作られた比重計で、全長十二・十三センチのガラス製浮秤である。これを温度十五度Cの清酒の中に浮べて目盛りを見る。清酒の比重が水より大きいと浮秤は0の目盛りより上に浮き出し、マイナスの目盛りを指す。水より比重が小さいと、0の目盛りより下に沈み、プラスの目盛りを指す。プラスになればなるほど率口ということになり、マイナスは反対に甘口ということになる。しかしながらどんな酒度を辛口とし、また甘口とするかは基準がない。そのため現状では酒造家各自が甘口、辛口と表示しているが、甘口とすすめた酒が甘口ではないかといわれる場合が多々ある。一般的な日本酒度は商品に表示してない。安曇の酒の甘辛は目安として図に示した。酒の博物館では試飲コーナーで来館者に試飲をさせていただき、甘辛の判定をしてみたらいい。その後酒度計で測るので、あなたの好みと、舌のたしかなさがわかるようになってくる。一度おためしにご来館のほど。

(酒の博物館)

庚申講

荒井金重

ある特定の宗教上の信仰にもとずいた人達の集りを「講」といいますが、古くより「念仏講」とか「伊勢講」というようないくつもの「講」がこの地方(大北)でも行なわれてきました。このうち、「庚申講」という「講」があります。今回はこの「講」についてお話ししながら「講」と地域住民のつながりについて考えてみたいと思います。

庚申講は、六十日に一度回ってくる庚申の日と六十日に一度回ってくる庚申の年をもとにできています。庚申の日は六十日に一度で

すから年六回あります。私達の地域(大町市源汲)では、現在十一戸から講仲間ができており、庚申の日には、あらかじめクジで決めてあつた当番の家に集り、酒食を共にしながら、その時の地域の話題や作物のでき柄などについて語りあいます。

当番の家では、朝から主婦を中心に酒や肴の用意に当ります。この肴は決して魚や肉類を用いず吸物、揚げ物、おひたし、豆腐などから献立を立てます。かつては、精進料理の形式によって吸物、面々、先皿、平などを整



えたこともあつたようですが現在では、かなり簡略にしております。これらの肴が終つた後、その日に一戸当り五合ずつ集めた米によつて炊いた夕食を食べ更にお茶を飲んで散会します。

この講の日には、庚申の祭壇を設けます。祭壇は、正面に掛軸を掛け、前に座卓を置き花立、燈明、線香、御神酒を供えます。掛軸は中央に青面金剛、左右に童子、下には鬼、にわとり、三猿(見猿、聞か猿、言わ猿)が配置されたものです。酒食の前にこれを拝し、「オコウシンデ、コウシンデ、マイトリソワカ」などを唱え更に供えた御神酒を回して飲みます。六回の講の日のうちその年の第一回めを「初度」、最後を「詰度」といい、詰度の日は、飯のかわりに餅をつけて祝います。

ところで、一昨年は、六十年に一度の庚申の年でした。私達の地域ばかりでなく各地で庚申塔を建てたようです。私達の地域でも一年遅れて昨年、庚申塔を建てました。この庚申塔は必ずしも六十年に一度建てたものではないようですが、それでも私達の地域では古いものは元禄年間から三基の庚申塔があります。この地方では、この庚申を祭つたお堂としては、大原町の庚申堂が有名です。庚申塔にはいろいろな形式がありますが、河原石の大きなものの表面を磨いて刻んだものが多いようです。

この庚申講の仲間をこの地方では訛つて「おかのい仲間」と呼びます。おかのい仲間は親類以上のつながりを持っており特別の問題があつた時は助け合うことをはじめ、つれだつて旅行などをします。このため、現在まで、他の講が消滅したりしても続いているのかも知れません。

庚申講の起源については私はくわしくは知りませんが、「道教の教えの中に庚申の日になると人体の中に三戸の神がおり、その人の平常の罪を眠っている間に天帝に上訴して寿命を縮めようとするので、青面金剛を祭り、そ

の夜は慎み深く善事を積む。」(向山雅重先生「日本の民俗長野」とあります。また、山岳信仰の富士山詣を目的にした講に富士講というものがあつたようですが、この富士講を山伏が地域に定着して広めたのが、その地域の共同性と結びついて成立したとの説もあるように聞いています。

いずれにしても上からの宗教とは別に、道祖神が民衆の生産に結びついた素朴な神仰とすれば、庚申講は、リクレーションや共同の行事と結びついた宗教的な共同体であつたと思います。そして、現在、テレビはじめたくさんさんの娯楽が発達し、こうした地域住民の共同の娯楽が消えつつあることは、なにかさびしい気がいたします。

(大町市平源汲)

博物館だより

新館へ資料一部移転

去る2月13・14日の両日、旧館に所蔵されている資料の一部を移転させました。この移転には山博友の会の会員多数が参加協力いたしました。遠くは東京から移転のお手伝いにかけてくれた会員もいました。

イヌワシ死亡

2月7日、山博付属園で昭和26年より飼育されていきましたイヌワシが死亡しました。剥装になり新館に展示される事になっております。

山と博物館 第27巻 第2号
 一九八二年二月二十五日発行
 発行所 長野県大町市 TEL②〇二二
 印刷所 長野県大町市俣町 大町山岳博物館
 大糸タイムス印刷部
 定価 年額二〇〇円(送料共)切手不可
 郵便振替口座番号 長野四一三三一九三